

と 巻頭特集

安八町出身の旅行作家
イシコさん

地元を拠点に、 次なる挑戦へ

多種多様な職業を経て、現在は世界中を旅する
旅行作家として活躍中のイシコさん。

安八町を拠点に、地域に根付いた活動も
積極的に行っています。

バイタリティーあふれる

これまでの歩みを振り返りながら、
地域への思いや、今後の目標を聞きました。

イシコさんに聞く／

思い出深い世界の国ベスト3

セカイサンボプロジェクトで約50都市を巡ったイシコさん厳選!思い出深い国ベスト3を紹介。中には聞いたことのない国があるかも……!?



第一位 ブルキナファソ

生活しているのはみんな黒人中、自分だけが日本人という衝撃は、今ではっきりとおぼえています。決して裕福な国ではないはずなのに、お酒をおごつてくれようとした人も。お金とは関係のないところで、豊かな生活が息づいている環境にすごく影響を受けました。



第二位 ミャンマー

軍事政権時代、路上で大道芸をしていたら監視がついたときもありましたけど、人のあたたかさを感じられて、妙に居心地はよかったです。昔の日本もこんな感じだったんじゃないかな。写真はウインセントヤの巨大涅槃像と、落ちそうで落ちないゴールデンロックの模型。



第三位 キューバ

社会主義なので、教育や医療などは無料。資本主義とは違う国という意味でも、すごく新鮮に感じられました。とにかくまちには常に音楽があふれていて、みんな楽しくダンスをしている、そんな印象ですね。ピカピカに磨かれた50、60年代のアメ車をよく見かけました。



大道芸を披露して約10年旅の経験が物書きの道を生む

パフォーマンス・アーティスト、エッセイスト、編集長。驚くほど多彩な顔を持つイシコさんは、安八町出身。県立大垣北高等学校を経て、静岡大学理学部を卒業後、上京を果たしたことが、多方面で才能を開花させるきっかけとなりました。

東京では、映画制作会社や浅草サンバカーニバルの広報、ミュージカルの制作など、さまざまな職業を経験。やがて広報の仕事でつなげた仕事仲間からの紹介で、大手ファーストフード店のキャラクターに扮する仕事舞い込みます。

キャラクターを演じるにはパントマイム、マジックといった特殊な技術が必要。イシコさんは約2カ月で大道芸の技術を身につけ、全国をまわって子どもたちにショーを披露する生活を約10年にわたって続けました。海外に行くようになったのは、ちやうどその頃。滞在先の国でも、路上で大道芸を披露しました。

「旅先での経験を、エッセイとして書かないか」。出版社から声をかけられたのを縁に出版業界とのつながりが生まれ、やがて女性ファッション誌とWEBマガジンの編集長を歴任。女性ファッション誌の編集長時代、ニューヨークを拠点とするパフォーマンスアート・カンパニー「ブルーマン・グループ」の公演に刺激を受け、2003年の「ホワイトマンプロジェクト」設立にいらいます。

ホワイトマンプロジェクトは弁護士やゲームクリエイターなど、業種・職種を問わず集まったメンバー総勢およそ40人によるパフォーマンスアート集団です。さまざまな境界を取り払うため、全員顔を白塗りして本名は伏せ、その人の能力のみをプロジェクトに集結。環境省による地球温暖化防止活動への参加、「各分野の未来をプレゼンする」というコンセプトのもと、6日間連続で実験的なショーを開催するなど、5年間で多種多様な取り組みを展開しました。

約50都市を1年間で旅行発見から新たな視点を得る

ホワイトマンプロジェクトの設立と前後して、エッセイストとしての仕事も本格化。本やモノにまつわる連載を経て、2008年に世界中を旅しながら雑誌や新聞に紀行エッセイを書きつづる「セカイサンボ」というプロジェクトを開始しました。

旅行が大好きなイシコさんにとっては、まさに念願といえる仕事。一都市あたりの滞在期間は1週間で、アフリカ、ヨーロッパ、南米、北米、アジアなど約50都市を、およそ1年間かけてまわりました。

テーマは、「もしもそのまちで暮らすことになったら」。それぞれの都市では散歩をしたり、スーパーで買物をしたり、ゴミの回収を眺め続けたりと、普段どおりの生活を実践。観光地にはほとんど足を運ばない一風変わった紀行エッセイは、大きな反響を呼びました。

「今はネットでなんでも見られる時代ですが、匂いや空気感は、やはり実際に行ってみないとわかりません。それぞれの国を五感で感じとる経験を通して、これまで気づけなかったことに目を向け、いろいろなことを違った視点から見られるようになりました」

2012年には、初めてのエッセイ集となる『世界一周ひとりメシ』を刊行。電子書籍を含め、これまでに5冊の著書を発表しています。さらに2018年からは、セカイサンボの日本版として「ニホンサンボ」を開始。これまでに国内16都市をまわっていて、今後も自分のライフワークとして継続する予定です。

初対面の人と仲良くなる秘訣とは?

世界中を旅しながら、数多くの出会いを経験してきたイシコさん。「本当はすごく人見知りなんです」と言いながら、2つのコツを教えてくださいました。「自分がいつも気をつけているのは、まず笑顔で挨拶すること。そしてもう1つは、きちんと相手の目を見て話を聞くこと。この2つができれば、たとえ多少時間がかかっても、最終的には良い関係を築けるようになるはずですよ」。

4月は多くの人が新生活をスタートする季節。イシコさんのアドバイスを参考に、皆さんもぜひ新しい出会いを楽しんでみては。

白塗りのパフォーマンスアート集団、ホワイトマンプロジェクト。2004年には、東京渋谷区にあった青山円形劇場で、6日間にわたって50コンテンツものショーを行いました



今年から家庭菜園も始めたというイシコさん。「このまちは、熱意を持っていると周りの人が助けてくれる。10年後には、もっと楽しい場所になっていると思いますよ」と話してくれました

ヤギプロジェクトをはじめ地元での活動も大切にしたい

イシコさんが生まれ育った安八町に戻ってきたのは、セカイサンボの旅から帰国した後の2010年。最初は地元でのんびりしようと、一時的に戻ってくるだけの予定でした。ところが、あまりにも居心地がよかったため、そのまま居着いてしまったのだといいます。

同年夏には、地域の耕作放棄地に着目し、持ち前の企画力を発揮。ヤギを飼育して伸び放題の草を食わせ、子どもたちが自由に遊べる場所をつくる「ヤギプロジェクト」を立ち上げました。落ちている木を使って基地をつくったり、夜にバーベキューをしたり、子どもたちと旅に出たりと、子どもたちとの関わりを深めていきました。

さらに地元の消防団に入り、多くの旧友と再会します。ちなみにペンネームの「イシコ」は小学校時代からのニックネームで、名づけ親は旧友たちとのこと。その後は7年にわたって町の教育委員を務めるなど、地域に根付いた活動にも力を入れています。

「今は自宅の庭で近所の方々と夕食前に軽く酒を飲みながら、その日の出来事を語り合う時間が好きです」とイシコさん。「安八町は生活と時間にゆとりのある、本当の意味で豊かな地域。いろいろな国で幸せそうに暮らしている人たちを見てきました。このまちには同じような環境がそろっているんです」

現在も地元を拠点にしながら、旅に出てエッセイを書いたり、講演をしたり、さまざまな企画のコーディネートを務めたりと、その活躍は留まることを知らないイシコさん。これからも豊富なアイデアと現状に留まらない行動力を発揮して、地域を楽しく盛り上げてくれるに違いありません。

イシコ

1968年、安八町生まれの旅行作家。主な著書に「世界一周ひとりメシ」(幻冬舎)、「世界一周ひとりメシ in Japan」(幻冬舎)、「人生がおもしろくなる!ぶらりバスの旅」(幻冬舎)、「世界一周飲み歩き」(朝日新聞出版)など

ブログ
「イシコのセカイサンボ」
<https://ameblo.jp/sekaisanpo/>

Twitter
<https://twitter.com/sekaisanpo>

